

平成20年度(第17回)ブループラネット賞 受賞者を迎えて表彰式典並びに祝賀パーティを開催

平成20年度(第17回)ブループラネット賞の表彰式典を、平成20年11月12日、東京會館において開催しました。本年度の受賞者は、極地氷床コア分析に基づく気候変動の解明、特に、氷期、間氷期間の気候変動と大気中の二酸化炭素との相関関係を見出し、現在の二酸化炭素の濃度が過去にない高いレベルにあることを指摘し、地球温暖化に警鐘を鳴らしたフランスのクロード・ロリウス博士と、エネルギーの保全・利用の効率化に関わる政策の立案施行に大きく貢献し、途上国の持続可能な発展のための先駆的概念を提唱するとともに、リオ地球サミットに向け強いリーダーシップを発揮したブラジルのジョゼ・ゴールデンベルク教授です。

表彰式典は、秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り、各国大使をはじめ、官界、政界、学界、経済界を代表する数多くのご来賓にお集まりいただきました。

地球という「命の船」の航跡に思いを馳せ、この青い惑星の行方に思いを致すための一助となれば、

と願いを込めたイメージ映像で開幕しました。

瀬谷博道理事長の主催者挨拶に引き続き、吉川弘之選考委員長より選考経過報告ならびに両受賞者の紹介がなされ、その後、理事長より両受賞者への贈賞が行われました。

秋篠宮殿下からお言葉をいただき、続いて望月晴文経済産業事務次官から麻生太郎内閣総理大臣のご祝辞が披露された後、受賞者の国を代表して、フィリップ・フォール駐日フランス共和国大使ならびにルイス・アウグスト・カストロ・ネヴェス駐日ブラジル連邦共和国大使からご祝辞が述べられ、両受賞者の地球環境問題に対する熱意と業績が讃えられました。

式典に引き続いて行われた祝賀パーティーは、ご来賓の方々の祝福で和やかな雰囲気になりました。ロリウス博士とゴールデンベルク教授の周りには、たくさんの方々が集い、優れた業績を讃える言葉が述べられました。

ブループラネット賞
表彰式典にてお言葉を
述べられる秋篠宮
殿下



クロード・ロリウス博士

ジョゼ・ゴールデンベルク教授

受賞の辞 — 抜粋 —

クロード・ロリウス博士



このたび、旭硝子財団のブループラネット賞を受賞するのはこの上ない榮譽です。

30年ほど前、極地の氷に残されていた記録を読み解くことで、大気中の温室効果ガスと気候との関係を発見することが可能となり、そしてこの関係は、今日私たちが直面する地球温暖化を理解する鍵を与えてくれました。最近出された、日本を初めとする世界の専門家がまとめたIPCCの報告と、国連が発した警鐘によって、私たちは地球温暖化問題が人類社会にとって大きな挑戦課題であることを知りました。

しかしながら地球の環境悪化は、気候のみに限られているわけではありません。二酸化炭素は主にエネルギーの生産によって発生する人間の活動を示す代表的なガスですが、ノーベル賞受賞者であるPaul Crutzenは、極地の氷中の二酸化炭素濃度の測定結果をもとに、人類は新しい時代、すなわち「人類紀」に入ったと唱えています。「人類紀」とは、人間が地球環境の健全さを保つ上で主要な役割を担う時代を意味しています。

ブループラネット賞は、リオサミットが開催された年に創設されて以来、環境問題を主要なテーマに掲げています。この賞は、持続可能な発展という展望を抱いて尽力するあらゆる分野の個人や組織に多大な支援をすることによって、環境悪化への意識を向上させることに多大な貢献をしています。この持続可能な発展こそ、現代社会が実現に向けて懸命に努力をしているものです。地球温暖化や環境の劣化が社会や経済に及ぼす影響は、貧困、飢餓、難民の移動等、数多くあります。このような状況は極めて憂慮すべきことから、非常に悲観的な科学者や哲学者は、人類が長期的には消滅する可能性さえ示唆しています。

したがって、旭硝子財団のような組織の役割はこれまで以上に重要かつ緊急性の高いものとなります。世界の市民すべてに環境権を与えることは非現実的とも思われますが、環境が本質的に持つ世界性は、市民や政治・経済の政策決定者、あるいは各国政府の利害を超えた国際的な統治機構を必要とすることを誰もが認識しています。国際的統治機構こそ、私たちが子孫に住みやすい地球を残せる唯一の方法なのかも知れません。

このように理想的な目標に向けて、旭硝子財団の活動が大変重要なのではないのでしょうか。

ジョゼ・ゴールドンベルク教授



ブループラネット賞は“人類の科学的英知と世界環境の保全ならびに人と自然との調和ある共存に貢献をした個人や組織の努力を顕彰する”ことを目的に創設されたもので、私はその精神に則って選ばれたことを大変榮譽に存じます。

私の研究活動は、殆どの同僚の物理学者と同じく、自然界の内面の仕組み、中でも私の場合は、原子核の仕組みの発見に専念することから始まりました。それはやがて発展途上国のエネルギー源としての原子力発電について学ぶことにつながり、私の関心は、さらにエネルギー生産や使用およびエネルギーが人類の幸福を促進する上で果たす基本的役割へと広がりました。

エネルギー問題に関わる方は誰でも、今日世界で使用されるエネルギーの大半が石炭や石油、ガス等の化石燃料であることをすぐに指摘します。その化石燃料には予期しなかった、大変深刻な問題が数々あることが分かりました。つまり、この化石燃料は究極的には枯渇してしまうこと、世界で資源が偏在するために獲得に地政学的問題を招くこと、そして最も大切な問題として、地球温暖化のように環境に悪影響を及ぼすこと等です。

私は過去数十年間にわたって、この問題の解決に、発展段階の中では後発部隊である発展途上国の視点から取り組んで来ました。これは、一見発展途上国にとって不利なように見えますが、逆に有利な点にもなっております。何故なら、発展の早い段階で、今の先進諸国が使っている効率的で公害を発生させない技術を採用できるからです。換言すれば、発展過程で、いくつかの段階を“跳び越える”ことができるからです。

私は、このような“跳び越え”が可能な事例を特定し、それらを実践普及させることに努めてきました。ブラジルで、ガソリンの代わりにサトウキビから生産されるエタノール、つまり再生可能資源が燃料として導入されましたが、これは“技術の跳び越え”の代表例です。

他にも“跳び越え”の例は数多くあります。19世紀に日本が数十年の内に偉大な国家として台頭したのも一つの例と言えます。つまり明治維新は、工業化に長い年月を要した英国やドイツが歩んだ段階を辿らず、当時の世界最先端の技術を採用しました。

私は、旭硝子財団のブループラネット賞を受賞したことで、私自身や同僚の努力が評価されたことを大変嬉しく思います。

ませんか？

可能な社会構築へ舵を切る転換期です。



贈賞理由紹介 吉川弘之選考委員長



クロード・ロリウス博士

ロリウス博士は、主に南極大陸の氷を掘削して得られる氷床コアを分析することにより過去の地球の気候変動を解明しました。博士は1957年、南極内陸の標高2,400メートルの氷の上にあるシャルコー基地で初めて越冬を経験し、南極の魅力に取りつかれます。そして、以後1998年まで合計22回、南極を主に極地探査を行いました。冷戦最中の1984年末には地球上で最も寒いソ連のポストーク基地に足を踏み入れ、そこで採取した氷床コアの分析から氷期、間氷期間の気候変動と大気中の二酸化炭素・メタンとの相関関係等を見出したことは画期的でした。博士は、390ppmに達した現在の大気中の二酸化炭素濃度は、今や、人間活動による影響を示すものと考え、人類が地球環境を支配する「人類紀」という新しい時代に入ったと考えています。

ジョゼ・ゴールデンベルク教授

ゴールデンベルク教授は、1970年代の石油危機後、ブラジルの原子力発電導入の議論に深く関わったことから、エネルギー問題を広く研究するようになりました。1980年代半ばに、「持続可能な世界のためのエネルギー」を著し、「持続可能な世界」を達成することを社会的目標として取り込んだエネルギー計画に基づくアプローチの重要性を説き、また、途上国が発展する上での「技術の跳び越し (technological leapfrogging)」の概念を先駆的に打ち出しました。1992年のリオ地球サミット時には環境長官を務め、その準備や気候変動枠組み条約採択のために活躍されました。その後も、「国際エネルギー・イニシアチブ」を組織されるなど、途上国におけるエネルギーへの取り組みに影響を与えて来られました。教授は今も、世界が直面する環境に関わる最大の脅威である気候変動の問題に、エネルギー戦略の面から解決策を見出すべく指導力を発揮されています。

プロフィール映像より抜粋

クロード・ロリウス博士



サッカーに熱中した
ブザンソン大学時代

1957年
南極越冬隊員として
シャルコー基地に滞在



冷戦の最中、
ソ連ポストーク
基地に参加。
ロシアの隊員と



1998年
採取した氷床コアから
過去42万年間の二酸化
炭素濃度、気温の
関係を明らかにした



氷床コア



研究者達と

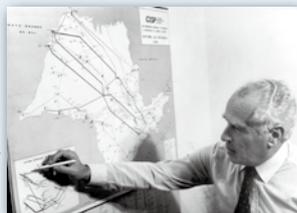
ジョゼ・ゴールデンベルク教授



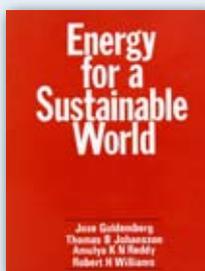
サンパウロ大学で物理学
を専攻

3人のエネルギー研究者と、
新エネルギー戦略、「持続可能な
世界のためのエネルギー」を発表

1982年
サンパウロ州エネルギー
公社社長として幅広く活動



1986年から4年間、
サンパウロ大学の学長
を務めた



環境大臣代行として、
リオ地球サミットの
成功に大きな役割をはたした



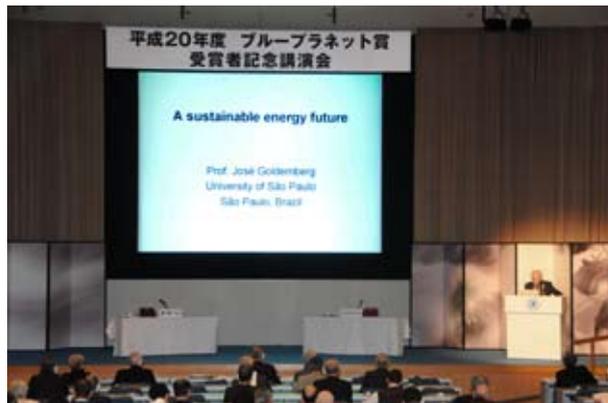
国際エネルギー・イニシアチブの
スタッフと

af
THE ASAHI GLASS
FOUNDATION

多数の聴衆を集めて受賞者記念講演会を開催

11月13日には、東京・国際連合大学ウ・タント国際会議場において受賞者の記念講演会が開催されました。300名を越える方々が参加され、満席となる盛況でした。第1部ではロリウス博士の講演と、総合研究大学院大学監事・国立極地研究所名誉教授の渡辺興亜博士のコーディネートによる質疑応答、第2部ではゴールデンベルク教授の講演と財団法人地球環境産業技術研究機構副理事長・研究

所長の茅陽一博士のコーディネートによる質疑応答が行われました。コーディネーターの巧みな対話と進行によって、会場の参加者からも多くの質問が集まり、中身の濃い活発な質疑応答が展開されました。受賞者の方々の業績に対する理解が深まると共に、私たちの行動の指針を学ぶ貴重な機会となり、充実した4時間弱を過ごしました。



——環境問題に携わる世界の有識者の認識—— 第17回「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート」調査結果

当財団では、環境問題に携わる世界の有識者を対象に、環境問題に対する様々な取り組みに関して意識調査を1992年以来継続して行っています。地球環境を保全するにはグローバルな対策が不可欠であり、世界の人々が環境問題解決に向け共通の認識を深め、協調関係をはぐくむことが重要と考えているからです。2008年4月～5月に実施した調査の中から「環境危機時計」について報告します。調査結果はホームページ (<http://www.af-info.or.jp/>) にも掲載しておりますので、ぜひご参照ください。なお、調査票や報告書作成にあたっては、地球環境戦略研究機関特別研究顧問で当財団理事の森島昭夫先生に監修していただきました。(アンケート回収数 732 [国内 314、海外 418]、回収率 16.8%)

人類存続の危機に対する認識「環境危機時計」

「環境危機時計」とは、回答者が地球環境の悪化に伴う人類存続の危機の程度を時計の針で表示したものです。2008年は前年に比べて2分進み、9時33分となり、これまでで最も針が進んだ危機意識の高い結果となりました。日本の危機時刻は前年に比べて8分進み、9時42分、海外合計は針が2分戻り、9時26分でした。

